

Department of INTER-MEDIA ART
TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

東京藝術大学 美術学部 先端芸術表現科 / 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
Department of Inter-Media Art, Faculty of Fine Arts / Department of Inter-Media Art, Graduate School of Fine Arts

2017





先端芸術表現科の理念と目標

先端芸術表現科が、世界に先駆け美術学部へ創立以来、19年の歳月が流れました。広くメディアを横断する現代の芸術表現と人材育成をめざし、2005年には、大学院博士後期課程の入学を迎え、修士、博士までの一貫した教育体制が整いました。その間、「取手アートプロジェクト」をはじめ、地域とグローバル社会を結ぶ実践に、精力的に取り組んでまいりました。近年では、「国際フォーラム：現代アートにおける社会実践」など新進芸術家育成事業が取手で展開されました。

本学科の卒業生は多岐にわたっています。表現者、アクティビストとして活躍する人材はもちろんですが、アートと社会を結ぶ仕事に就く者、また海外で活躍する者を輩出しています。

私たちは「もっとも先鋭的な学科」であり続けたい。また、革新とともに伝統の継承を問う存在でありたい。この航海に乗り込まんとする意欲にあふれた新しいメンバーを迎え入れたいと心から願っています。

Department of Inter-media Art – Goals and Principles

The Department of Inter-media Art was established as an art department on the global leading edge nineteen years ago.

The department welcomed its first doctoral students in 2005, making it a complete educational department including Master's and Doctoral programs. The department works enthusiastically to connect rural areas and the broader global community through activities such as the Toride Art Project. In recent years, the International Forum: Social Practice in Contemporary Art and other emerging artist development projects were held in Toride.

Graduates of the department have gone on to a diverse range of occupations. Naturally, many have become performers and activists, but others have gone on to play active roles in connecting art and society, while more and more work overseas.

We aim to continue being the "most cutting-edge department".

We also plan to be a presence that questions the continuation of tradition and innovation. New members full of willingness to board this voyage are sincerely welcomed.

教員紹介 FACULTY MEMBERS

伊藤俊治 Toshiharu Ito

教授(美術史家・美術評論家)

人間の能力を細かく分化させてゆくのではなく、分化する能力を再び統合し、全体性を愛する心を見失わないこと、専門化や細分化が有効なのは、それらを統合する何かがある時だけであり、創造性は全体性を内包することから自然に生まれてくること、そのことを体感する場が先端なのだと思います。

—

八谷和彦 Kazuhiko Hachiya

准教授(メディアアーティスト)

踊ってもいいし、音でもいいし、文章を書いても、写真でも映像でもいい。

……という風に「何を作ってもいい」と言われると、意外と人は悩んでしまうものかも。学生を見ると、たまにそういうことも感じます。けど、そういう風に真剣に悩む時間を人生の中で持つのは、実はとても大事で貴重、と思っているのです。

日比野克彦 Katsuhiko Hibino

教授(アーティスト)

アートのアートならではのところって、正しい答えがないところのような気がします。その時の自分の考え、その時の自分の表現がその時の自分にとってのとりあえずの答え。でも、それは正解じゃない。だからいつも次のことを考えている。芸大の長い歴史の中で、学生も教員もみんな次の表現のことを考え続けて来ている。そんな中で生まれてきたのがこの科です。先端芸術表現科の学生が考えていくことが次の芸大を次のアートに創ることになっていく。

小沢 剛 Tsuyoshi Ozawa

教授(美術家)

例えばキリの先っぽが先端であるためには、その後ろに伸びる鋼鉄(スチール)は美術の歴史、あるいは人間の想像力だ。更にその鋼鉄を支える丸く優しい木製の柄は、地球の回転か宇宙のゆらぎだ。それらの力を借りて、キリの先っぽは時代に風穴を開けてゆくのだろう。やがてはキリの先っぽは摩耗してくる。キリの先っぽは常に鋭利で無くてはならない。

—

たほりつこ Ritsuko Taho

教授(パブリックアーティスト)

現代アートの実践、歴史、評論、企画運営といった幅広い領域に関わる多彩な教員が集まり、各自のテーマや方法による教育研究をおこなっています。内容を深化させ、決断と実行によって、制度とは異なる思考と実験の地平が拓かれています。その絶妙なバランス、自在に進化する創造性を内包する、稀にみる魅力的な学科なのです。

佐藤時啓 Tokihiro Sato

教授(美術家・写真家)

先端創設時から参画した。本学彫刻科出身者として当初は戸惑うことも多かった。しかし今は確実に言える。「なぜそのメディウムで表現するのか?」ということが対照化され、社会との関係性、そして芸術の置かれた立場などについて客観視できる場所。作ることを考えることの両輪を実現し実践する現場。先端はそんな場所なのだ。

—

長谷部 浩 Hiroshi Hasebe

教授(演劇評論家)

私は、本来の専攻が近現代演出史である。そのため美術系パフォーマンスに限定しない幅広い身体表現を学生とともに探求してきた。また、身体に限らずすべての表現活動は、批評の言葉を鍛えることによって足腰が強くなると考えている。身体や言語に関心のある学生にぜひ志望してもらいたい。

小谷元彦 Motohiko Odani

准教授(美術家・彫刻家)

今日の表現者の前には、ペインティングや彫刻など従来の手段だけではなく、様々な表現手段が広がっている。アーティストは社会の趨勢や異分野、歴史から刺激を受け、表現のコンセプトを掘んでいく。そして領域横断の方法は、表現手段だけに留まらず、見せる場や波及効果にまで至る。先端はそんな方法論が見つけやすい場だと思う。

—

飯田志保子 Shihoko Iida

准教授(キュレーター)

アーティストは内外の世界に目を向け、人々に「気づき」をもたらす存在です。その実践は、他者の存在を認め、社会に対して批評的な問いを投げかけることから始まります。変化を恐れずものごとの本質を探究し続ける限り、先端芸術表現科にはアートと社会を切り結んでいく大きな可能性があります。

鈴木理策 Risaku Suzuki

准教授(美術家・写真家)

ひとつの表現形式を学ぶことは、その技術を知り、高い表現性を目指してゆくものだと思います。ただ、自分の表現したいものがひとつの形式に収まるとは限りません。変化し続ける世界の中で何を感じ、どう表現するのか。先端はそうした問いに直面する場です。自身の表現を構築するための多様な刺激に満ちていると思います。

—

古川 聖 Kiyoshi Furukawa

教授(音楽家・作曲家)

先端芸術表現科という所の領域横断性とはアートの枠内での移動や組み合わせではなく、アートとアートではないものの間を歩き来つつ、アートの外側の様々な場所に(たとえそれが困難な事であるにしろ)点を打ち続け、そのメタポジションから見えてくる、アート各領域の関係性を探るような、絶え間の無い動きのようなものだと思う。



Toshiharu Ito

Kazuhiko Hachiya

Katsuhiko Hibino

Tsuyoshi Ozawa

Ritsuko Taho

Tokihiro Sato

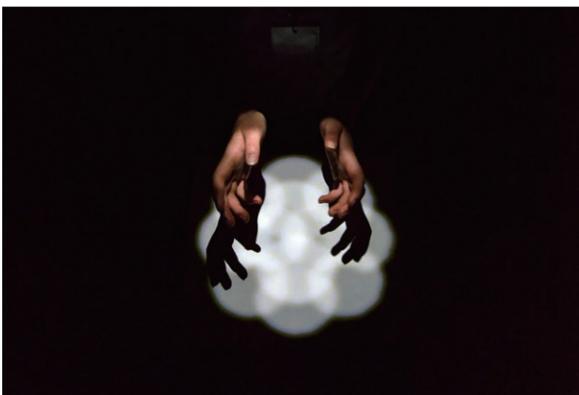
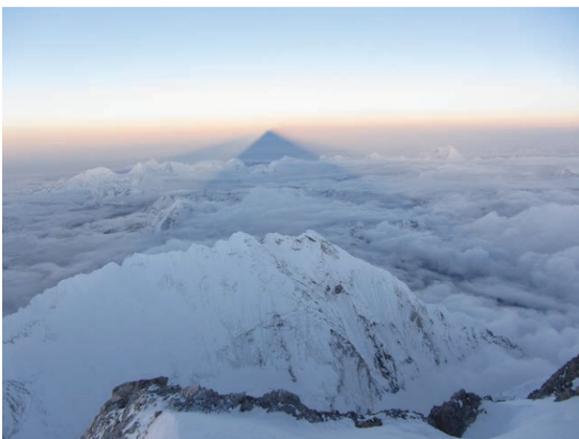
Hiroshi Hasebe

Motohiko Odani

Shihoko Iida

Risaku Suzuki

Kiyoshi Furukawa



卒業生紹介 GRADUATES

有坂亜由夢 Ayumu Arisaka

アニメーター、イラストレーター。1985年千葉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。映像チーム「最後の手段」のメンバー。主な仕事は、でんぱ組.inc [GOGO DEMA TOUR 2016] アートワーク担当、Eテレ「シャキーン!」クイズコーナー担当など。MV「やけのはら/RELAXIN'」が文化庁メディア芸術祭2013 エンターテインメント部門新人賞受賞。http://www.saigono.info/

アルカディリ・モニラ Monira Al Qadiri

クウェート国籍のアーティスト。1983年セネガル生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。中東を中心に「悲しみの美意識」やジェンダー問題を取り上げ、宗教と文化的アイデンティティが失われていく事を作品のモチーフにしている。2013年から「GCC」というアーティスト集団のメンバーになり、翌年ニューヨークのMOMA PS1で個展を行った。現在アムステルダムのアートレジデンス「ライクスアカデミー」を拠点としながら、世界各国で展示やレクチャーを行う。http://www.moniraalqadiri.com/

石川直樹 Naoki Ishikawa

写真家。1977年東京都生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。2000年、Pole to Poleプロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破、2001年、7大陸最高峰登頂達成。「CORONA」(青土社)により第30回土門拳賞を受賞。著書に「全ての装備を知恵に置き換えること」(集英社)、「世界を見に行く」(リトルモア)、開高健ノンフィクション賞を受賞した「最後の冒険家」(集英社)ほか多数。2016年に開催された水戸芸術館での個展「この星の光の地図を写す」が新潟市美術館、熊本市現代美術館、初台オペラシティなど全国巡回中。http://www.straighttree.com/

岩田草平 Sohei Iwata

アーティスト。1979年和歌山県生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。文化庁在外研修生としてインドへ渡る。インド先住民族のサンタルと《アディバシの給水塔》を制作する。主な活動に「記憶のイメージ/イメージの記憶」BankART Studio NYK(神奈川)、「Trans Arts Tokyo 2014」旧東京電機大学(東京)、「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス」市原(千葉)、「六本木クロッシング2013」森美術館(東京)、「瀬戸内国際芸術祭2013」本島(香川)、「土のつわもの」国際交流基金(ニューデリー:インド)。2016より「Artist's Studio」というゲストハウスの運営を開始する。http://sohei-iwata.jp/

及川潤郎 Junya Oikawa

サウンドアーティスト。1983年仙台市生まれ。ドイツ在住。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2013年フランス最大の電子音楽賞「Quartz Music Awards」実験・研究部門にて最高賞受賞。音楽・音響・空間芸術等を横断する多岐に渡る音表現を展開。主な活動に、2010年「トランスフォーメーション」東京都現代美術館(東京)、2014年、2016年「ビエンナーレBAINS NUMERIQUE」(フランス)、2016年「SEMIBREVE」(ポルトガル)、2015年、個展「Voice Landscape」法然院(京都)など。現在、ZKM客員芸術家。http://www.junya-oikawa.com/

大山エンリコイサム Enrico Isamu Ōyama

アーティスト。1983年東京都生まれ。2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。グラフィティ文化の視覚言語を翻案したモチーフ「クイック・ターン・ストラクチャー(Quick Turn Structure)」をベースに作品を発表し、注目を集める。コム デギャルソンやシュウ ウエムラとのコラボレーション、著書「アゲインスト・リテラシー—グラフィティ文化論」(LIXIL出版)の刊行など広く活動する。現在ニューヨーク在住。http://www.enricoisamuoyama.net/



《FIGURATI #159》
大山エンリコイサム / 2015-2017年 / 撮影: Aellel Male



《百人一首ノート》
今日マチ子 / 2016年 / KADOKAWA

片山真理 Mari Katayama

美術家。埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。受賞に、2005年「群馬青年ビエンナーレ奨励賞」群馬県立近代美術館、2012年「アートアワードトーキョー丸ノ内グランプリ」、2015年「3331 Art Fair 2015 和多利浩一賞、吉本光宏賞」。展覧会に、2010年「identity, body it. — curated by Takashi Azumaya — nca(東京)、2013年「あいちトリエンナーレ2013」(愛知)、2016年「六本木クロッシング2016」(東京)、「瀬戸内国際芸術祭2016」参加企画「アーティスト in 六区2016 vol.3 片山真理 bystander」宮浦ギャラリー六区(直島)など。

http://shell-kashime.com/

金川晋吾 Shingo Kanagawa

写真家。1981年京都府生まれ。神戸大学卒業。2015年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。第12回三木淳賞。2016年に青幻舎より「father」刊行。最近の主な展覧会に、2016年「悪い予感のかけらもないさ展」あざみ野市民ギャラリー(神奈川)、2015年「STANCE or DISTANCE? わたしと世界をつなぐ「距離」」熊本市現代美術館(熊本)など。

http://kanagawashingo.com/



《bystander #004》
片山真理 / 2016年



《father》
金川晋吾 / 2019年



《icles Sculpture》
小町谷圭 / 2016年

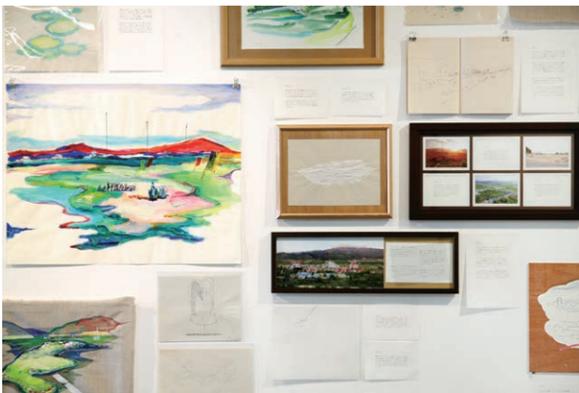
今日マチ子 Machiko Kyo

漫画家。東京都生まれ。1ページ漫画ブログ「今日マチ子のセンネン画報」が書籍化されて注目を浴びる。06年・07年・10年・13年文化庁メディア芸術祭「審査委員会推薦作品」に選出。著作に「みかこさん」「5つ数えれば君の夢」「ニフ」等多数。戦争を描いた「cocoon」は劇団「マームとジブシー」により13年に舞台化され、15年に再演、同年「みつあみの神様」も舞台化に。14年には「mina-mo-no-gram」「アノネ、」「みつあみの神様」「U」が評価され第18回手塚治虫文化賞新生賞を受賞。2015年には第44回日本漫画家協会賞大賞カートーン部門に「いちご戦争」が選ばれた。

http://juicyfruit.exblog.jp/ twitter: @machikomemo

小町谷 圭 Kei Komachiya

メディア・アーティスト。札幌大谷大学講師。東京生まれ。2005年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。絵画制作を経て電子メディアを使用した作品を発表。主な活動に、「Materia ex machina—機械仕掛けの絵肌—」NTT インターコミュニケーション・センター [ICC] (東京)、アナログ放送停波後、各局の周波数に合わせて過去映像を流した電波ジャックインストール「EndlessTv」、札幌国際芸術祭2017では、宇宙の文化芸術活用を推進するプロジェクトARTSATと共同で高高度気球を用いたプロジェクトに参画。http://komachiya.net/



小森はるか+瀬尾夏実 Haruka Komori + Natsumi Seo

映像作家の小森はるか(2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了)と画家で作家の瀬尾夏実(2011年同大学美術学部先端芸術表現科卒業)によるアートユニット。2011年3月、ともに東北沿岸にボランティアに行ったことをきっかけにして活動を開始。2012年、岩手県陸前高田市に拠点を移し、以後、日々移り変わる風景と人びとのことばの記録を続けている。2015年、東北で活動する仲間とともに、記録を受け渡すための表現を実践的につくっていく組織「一般社団法人NOOK」を設立。現在は展覧会「波のした、土のうえ」、「遠い火」山の終戦」を全国各地に巡回中。

<http://komori-seo.main.jp/>

下平千夏 Chinatsu Shimodaira

美術家。1983年長野県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。輪ゴムや鈴、水糸などの既成の事物が持つ固定的な意味を抽象化し、より醇化した存在に変異させる空間作品を発表している。主な個展に、2010年「implosion point」INAXギャラリー2(東京)、2014年「smell the frontier」Taipei Artist Village(台北)、2015年「エーテル」犬島家プロジェクト(岡山)。主なグループ展に、2016年「瀬戸内国際芸術祭(瀬戸内海)、2012年「Tokyo Midtown Art Award」(東京)などがある。

<http://www.shimodairachinatsu.com/>

鈴木ヒロク Hiraku Suzuki

アーティスト。1978年宮城県仙台市生まれ、神奈川県出身。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。「描く」という行為を主題に、平面、インスタレーション、壁画、映像、パフォーマンス、彫刻など多岐にわたる制作を展開、ドローイングの領域を拡張し続けている。様々な形態でのライブドローイングも行う。2017年FID PRIZEグランプリ受賞(パリ)。主な作品収蔵先は金沢21世紀美術館、ロンドン芸術大学など。著書に「GENGA」(河出書房新社/アニエス・ベー、2010年)などがある。

<http://hirakusuzuki.com/>

ニコラ・ビュフ Nicolas Bufo

アーティスト。1978年フランス・パリ生まれ。2007年以降東京に拠点を移す。2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。ヨーロッパの古典美術、日本や米国のサブカルチャーの混合をちりばめた作品で知られる。ファッション、建築、ビデオゲーム、オペラのアートディレクションなど、美術以外での活動も多い。2014年、原美術館にて個展「ポリフィロの夢」が開催された。同じテーマのビデオゲームが公開される予定である。

<http://nicolasbufo.com/>

※Clavel Arquitectos; J. Mayer H.; K/R; Keenen Riley; Nicolas Bufo; Sagmeister & Walsh and WORK AC

西尾美也 Yoshinari Nishio

美術家。1982年奈良県生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)等を経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。近年の主なグループ展に2014年「拡張するファッション」水戸芸術館(茨城)、2016年「あいちトリエンナーレ」、「さいたまトリエンナーレ」、2017年「ソーシャリー・エンゲイジド・アート展」アーツ千代田3331(東京)など。

<http://yoshinarinishio.net/>

潘逸舟 Ishu Han

美術家。1987年中国上海市生まれ。2012年東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。現在東京在住。主な展覧会に2017年「The Drifting Thinker」MoCAパビリオン(上海)、「ESCAPE from the SEA」National Visual Arts Gallery(クアラルンプール)、2016年「As far as I know」URANO(東京)、「Sights and Sounds: Highlights」ジューイッシュ・ミュージアム(ニューヨーク)などがある。

<http://www.hanishu.com/>

藤田俊太郎 Shuntaro Fujita

演出家。1980年秋田県生まれ。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中の2004年、ニナガワ・スタジオに入り、2005年以降2016年まで蛭川幸雄作品に演出助手として関わる。2014年「The Beautiful Game」演出にて第22回読売演劇大賞 杉村春子賞受賞。2015年「美女音楽劇 人魚姫」、2016年「ミュージカル手紙」JERSEY BOYS、「Take Me Out」、2017年「ダニーと紺碧の海」「ピーターパン」演出。第24回読売演劇大賞 優秀演出家賞受賞。第42回菊田一夫演劇賞受賞。絵本ロックバンド「虹艶(にじいろ) Bunny」としてライブ活動展開中。

<http://www.shuntarofujita.com/>

宮永愛子 Aiko Miyanaga

美術家。1974年京都府生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。主な展覧会に2012年「宮永愛子: なかそら一空中空一」国立国際美術館(大阪)など。

<http://www.aiko-m.com/>

目 Me

個々のクリエイティビティを特性化した、連携を重視するチーム型芸術活動。果てしなく不確かなこの世界の可能性を信じ、その先に鑑賞者の実感を引き寄せようとする作品を展開している。中心メンバーは、アーティストの荒神明香(2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了)、ディレクターの南川憲二(2009年同専攻修士課程修了)、制作統括の増井宏文の3名。主な活動に2014年「たよりない現実この世界の在りか」資生堂ギャラリー(東京)、「おじさんの顔が空に浮かぶ日」宇都宮美術館外プロジェクト(栃木)、2015年「Replicational Scaper」水戸芸術館(茨城)、2016年「Elemental Detection」さいたまトリエンナーレ2016(埼玉)など。

毛利悠子 Yuko Mohri

美術家。1980年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。磁力や重力、光など、目に見えず触れられない力をセンシングするインスタレーションを制作。2015年、アジア・カルチュラル・カウンシルのグランティとして渡米。「コーチ・ムジリス・ビエンナーレ2016」(インド)、「ヨコハマトリエンナーレ2014」(神奈川)ほか国内外の展覧会に参加。2015年に日産アートアワード、2016年に神奈川文化賞未来賞、2017年に第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

<http://www.mohrizm.net/>



FRESHMAN

【テーマ】自己を知る

1

1年次では、実技・必修講義など授業を上野校地を基本に行います。様々な専門性に特化したスタッフによるスタジオでの演習授業を中心として、ドローイング、コンセプチュアル・アート、写真、デザイン、工作・立体造形、身体表現、音楽、映像、など、多種多様なメディアの特性を分野横断的に学びながら、表現活動に必要な基礎的な知識や技術の習得を目指します。また、コンピュータの操作方法、芸術・美術史などの理論、リサーチやプレゼンテーションに必要な語学力も集中的に身につけることによって、基本的な読解力、柔軟な構想力、創造的な思考力を鍛えます。このように、実技と理論の両方をバランスよく学び、多彩な経験を積み重ねることによって、新たな表現を生み出すための能力や素養を身につけていきます。



スタジオ講習「ドローイング」

SOPHOMORE

【テーマ】他者と外部を知る

2

2年次では、実技授業を取手校地を基本に行います。前期の「スタジオ選択カリキュラム」では、1年次に学んだ知識や技術を応用し、多様なメディアを選択的・複合的に扱い、独自の表現方法を探索します。後期の「フィールドワーク」では、グループワークを基本として、学外の特定の地域をリサーチし、そこで得られた知識や情報に基づきながら、作品制作を行います。異なる個性や意見を持ったメンバーが綿密なリサーチ、議論、交渉を行い、作品プランを実現させる一連のプロセスを学びます。「エディトリアルワーク」では、画像編集からレイアウト、製本に至るエディトリアルデザインを学び、過去の自分の活動をまとめて他者に伝えるための技術を習得します。さらに、2年次の成果は学生の主体的な企画・運営によって開催されるアートイベント「取手アートパス」で一般公開されます。



スタジオ選択カリキュラム「写真」

JUNIOR

【テーマ】関係をつくる

3

3年次では、教員別の「研究室」に所属し専門的な指導の下、1～2年次で学んだスタジオ指導から自分の専門性を模索、思考し創作研究を行います。各研究室の内容は多岐に渡り、個人制作と研究室での活動との両輪をうまく利用して、さらに表現の幅を広げていくことが求められます。また、学年展示の「ミクストメディア・プラクティス(前期・後期)」で、展示を実践する経験を積み重ねます。2～3年次に選択履修できる「IMA演習」は、外部から多彩な顔ぶれのゲストアーティストや講師を招いて学年横断的に行なう短期集中の演習授業で、表現に対する知見を広げていきます。「古美術研究旅行」では毎年テーマを設定し、熊野、奈良、京都を中心に日本の古美術を見学します。本科独自の行程により、日本の伝統文化・美術に対する造詣を深めます。



古美術研究旅行

SENIOR

【テーマ】統合する

4

卒業制作を中心に、これまでの制作・研究活動を集大成していきます。所属研究室の教員の指導の下、領域横断的理論と実践を鍛えていきます。前期に「WIP(Work In Progress)展」、後期には「最終審査会」と段階を踏みながら進みます。「卒業修了作品展」に向けては個々の作品制作とともに、展覧会の企画運営にも学生が主体的に取り組んでいきます。

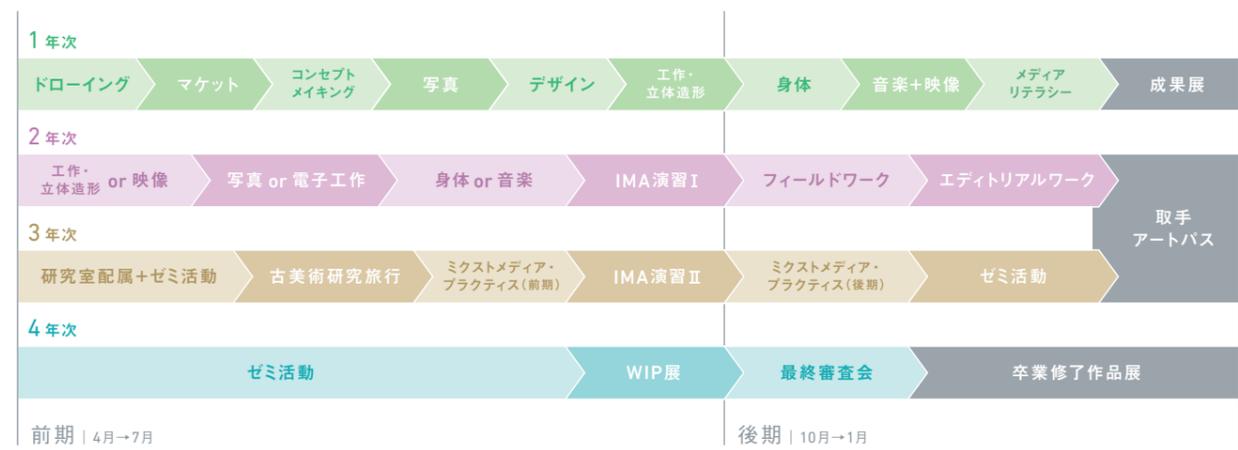
卒業修了作品展について

集大成の展示である「卒業修了作品展」は、毎年1月に東京都美術館で開催されます。先端芸術表現科ではイベント、広報デザイン、展示配置など、学生が主体となり展覧会を運営します。学生が制作するカタログは毎年趣向を凝らしたデザインと内容になっています。



卒業修了作品展

美術学部 先端芸術表現科 カリキュラムチャート | 2017年現在



大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

修士課程は少人数制による教育・研究環境となります。博士後期課程ではさらに個別の指導を行います。教員が学生に知識を伝達するのは、大学院教育の一面にすぎません。芸術が人々の意識を変革していくにあたって、教員と学生がパートナーシップを結び、その問題の所在を明らかにし、解決のための方策をともに考え創造していく場でありたいと願っています。狭隘な領域に分断すること無く、共通のゼミ(Art in Context)を設定し、美術に留まらない幅広い関連分野で活躍する多彩な人材が特別講義や演習などに参加し、さまざまな角度からアドバイスを与え、深く表現について学び、研究制作を進めます。博士後期課程では、自らの専門分野における研究を行います。作品制作や研究発表によって新たな知見を得、それに基づきながら博士論文を執筆します。

国際交流・留学

先端芸術表現科ではグローバルな視野や国際的に活躍できる人材を育成するため、留学制度を設けています。アジア、欧米の大学に留学し、さまざまな文化に接することができます。海外の留学生の受け入れも行っており、さまざまな国の学生と交流しています。

留学生派遣・受入先(一部) [韓国]ソウル大学校美術大学、韓国芸術総合学校 [中国]中央美術学院、清華大学美術学院 [イギリス]ロンドン芸術大学、ロイヤルアカデミー・スクール [オーストリア]ウィーン応用芸術大学 [ドイツ]ワイマール・パウハウス大学、シュトゥットガルト美術大学 [フランス]パリ国立高等美術学校、ナント芸術大学



右写真:ワイマール・パウハウス大学の授業風景



1F | ギャラリー
Gallery

天井高約8mのギャラリースペースになり、電動クレーンも併設しており、大型の作品も展示可能です。板張りの床なので、パフォーマンス等の発表にも使用しています。



101 | リハーサルルーム
Rehearsal Room

スタジオ講習「身体」等で使用するスタジオです。日頃はパフォーマンス、ダンス、演劇などの稽古にも利用しています。壁一面が鏡張りなので、練習の際にも活用できます。



103 | 写真スタジオ
Photo Studio

電動バンクライト4機、 Horizontなど設備されています。講習を受ければ、ストロボなど高度なスタジオ撮影が可能です。作品の記録撮影やポートレート撮影などに最適な環境です。



107 | 写真演習室
Photo Laboratory

スタジオ講習「写真」等で使用するスタジオです。暗室を完備しており、現像からプリントまで銀塩写真の技法を体系的に学べます。他にもカラー暗室、大型引き伸ばし機も完備しています。



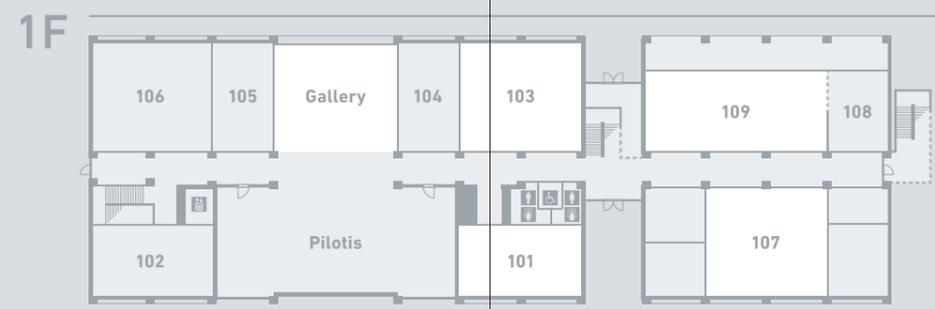
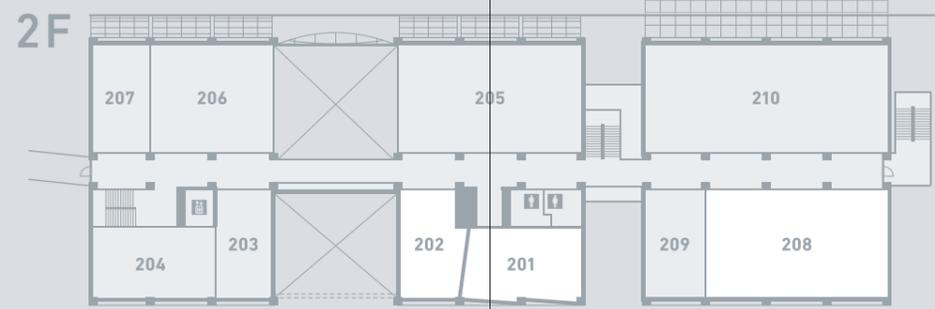
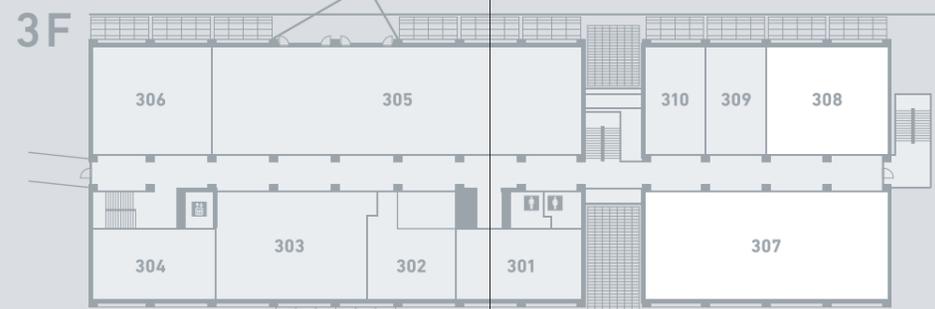
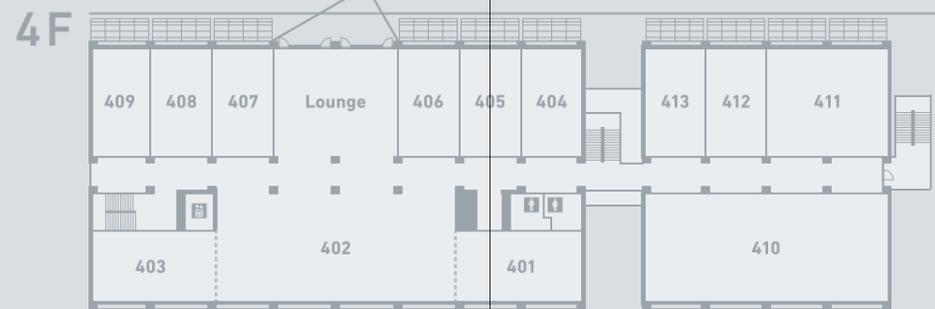
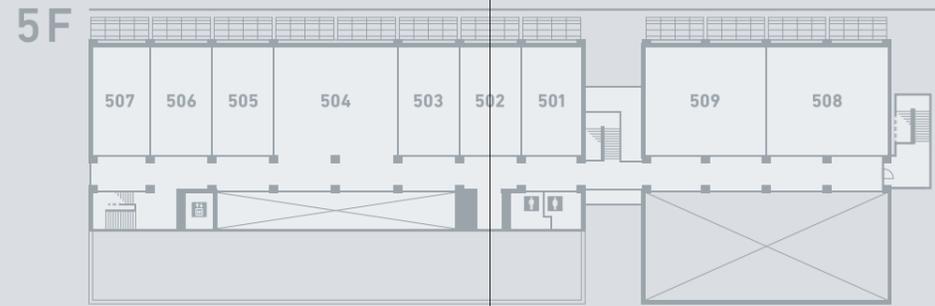
109 | 工作室
Work Studio

スタジオ講習「工作」等で使用するスタジオです。講習を受けた学生は、設備を使用でき自由制作をすることができます。パネルソーや、溶接機など各種工作機械を設備しており、木工や金工、各種素材の制作が可能です。



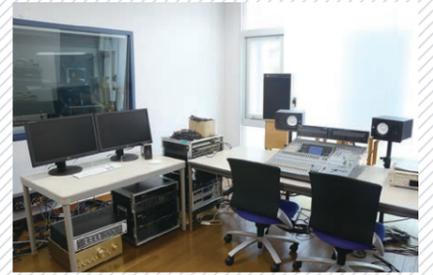
201 | 音楽スタジオ
Recording Studio

スタジオ講習「音楽」等で使用するスタジオです。高い遮音性と最適な響きを確保しています。ゆとりある広い空間で音楽関係の授業で使用されるほかにも、生演奏や音声の録音、楽器のレッスンなど学生の多様な制作作業にも対応します。



202 | 音楽プロジェクトルーム
Music Laboratory

音楽スタジオに防音ガラス窓を通して隣接するコントロールルームです。本格的なPA機器とデジタルレコーディング機材を完備し、録音のコントロールから編集作業、マスタリングまでを行なうことができます。



208 | コンピュータースタジオ
Computer Studio

28台のiMac、レーザープリンター、スキャナーを設備しており、映像、音楽、デザインなどの基礎的な授業を行います。授業外は常時開放しており、自由制作が可能です。



307 | 映像編集スタジオ
Image Editing Studio

スタジオ講習「映像」等で使用するスタジオです。実技の映像授業では、映像の基礎となる撮影をレクチャーし、スタジオで編集作業を指導します。映像編集スタジオでは、Premiereなどを使用し、より専門的な編集作業を行います。



308 | メディアデザインスタジオ
Media Design Studio

スタジオ講習「デザイン」等で使用するスタジオです。Illustrator、Photoshop、InDesignなど、DTPアプリケーションを使用した制作を行うスタジオです。大判プリンター、カッティングプロッター、各種製本機材等も使用できます。



上野キャンパス | Ueno Campus

1年次の実技、必修講義は上野キャンパスを中心に、美術学部絵画棟1階アートスペースやAMC(芸術情報センター)を使用し、授業を進めて行きます。

堀川詩保子さん | 修士1年次在籍 (2017年現在)

入学動機について

私は昔から欲張り、絵や音楽、映像、写真、なんでも一度は経験してみたいと思っていました。しかし人生の中で進路を考える時期にあたる都度、なぜ何か一つの分野に絞らなければならないのかという疑問を抱いていました。当時はいい方法が浮かばないまま別の大学に通っていましたが、そもそも自分は根本的に何がしたいのか、何故色々したいのかを見つめ直していたとき、ひよんな事から先端芸術表現科の存在を知り、受験を決意しました。

自分の活動について

私は目の前の物事が変容したり崩壊したりするのが好きみたいで、最近はずに写真を溶かしたり燃やしたりして、イメージと現象のあり方について模索しています。私達が頭の中に持つイメージは、私達が経験してきたあらゆる現象を五感で捉え、再構築したものであると考えています。そうして構築されたイメージを、現象を用いて崩壊させる事で、そこに新たなイメージが生まれるという循環を、目に見えないこの世の大きな流れになぞらえることができなにかという思いで今は制作しています。

受験生へのメッセージ

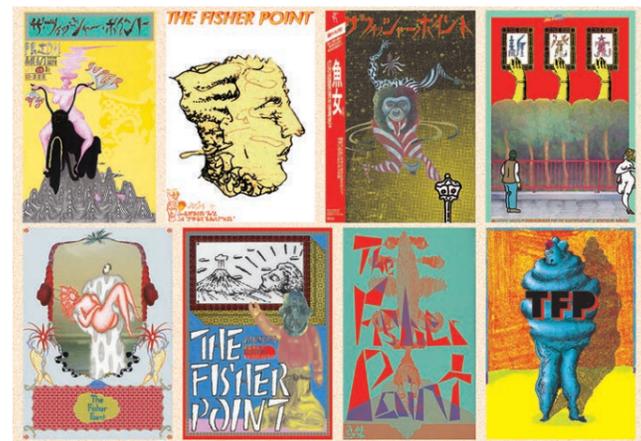
自由には責任が伴うと考えています。先端は表現に対して柔軟で自由です。しかしそこには常に、何故そうしたかったのかが付き纏い、自由だからこそ自分のやることに自分の意思が問われます。だから最終的には自分の意思に責任を持って決断していく事が大切だと思います。でもそれが一番の贅沢な気もします。



《Dew point》2017年/ミクストメディア

堀川詩保子 Shihoko Horikawa

1991年神奈川県生まれ。2017年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。現在、同科大学院修士課程在籍。写真や現象を扱ったミクストメディアを中心に制作している。主な活動に、「Searching for Tao」東京藝術大学学生会館(東京)、「Digital Humanize」東京藝術大学陳列館(東京)、「フリテン」デザインフェスタギャラリー(東京)などがある。



《the fisher point》2017年/ポスター、フィギュア



村松佳樹 Yoshiki Muramatsu

1995年静岡県生まれ。2014年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科入学。イラストレーションを軸にアニメーション、写真、ポスター、ロゴ、グッズデザイン、メインビジュアル、バンドのドームツアーアートワークデザインなど、主に平面の作品を制作している。2017年グループ展「今どきのポジション」東京藝術大学学生会館(東京)に参加。

村松佳樹さん | 学部4年次在籍 (2017年現在)

入学動機について

もともと映画、音楽、絵画、おもちゃに興味があり、それらを下敷きにして表現できる場として、僕にはイラストレーション、アニメーションがありました。僕の制作は家庭で自主的にできるため、大学では幅広い知識を吸収したいと考え、先端芸術表現科を志望しました。

自分の活動について

主にイラストレーションをやっています。線と色は自然物から借り、映画、音楽、絵画から世界観を構築しています。いつも発想のきっかけは夢、自然、日常です。空の雲の構図だったり、お風呂のタイルにはじいた水の形、枯れ木の曲線。気が抜けた瞬間の視線がどこへ行っているのかわからない時、無意識的な意識を大切にしています。そういった形に記憶や趣味的なものを肉付けしています。

受験生へのメッセージ

小学校の頃、休み時間にしゃがんでぼーっと草を見てたら、後ろから女の子がアリの「ハイ!」ってくれて。「お尻が美味しいよ!」って。僕、それで食べたんです。甘酸っぱかったんですね。アリのお尻。釜茹で煮え湯のような受験勉強ですが、そんな、ぼーっとしてるときの突然の発見のほうが大事だと思っています。その発見に特に意味がなくても、何か考えるきっかけになるので。煮え湯の航海から風の海に帆をきりましょ。ゆるゆるのんびりが大事です。

DEPARTMENT OF INTER-MEDIA ART

QUESTION & ANSWER

入学試験についてのQ & A

キャンパスライフについてのQ & A

Q 過去の試験問題を知りたいです。

A 上野校地の教務課で閲覧できます。東京藝術大学ウェブサイトでも閲覧可能です。

Q 試験会場の雰囲気を知りたいです。

A 試験会場は公開できません。公平に受験できるように照明や空調を整えています。

Q 入学試験の日程を知りたいです。

A 学生募集要項を確認してください。

Q 試験場所はどこですか。

A 博士と修士は取手キャンパスで実施します。学部は上野キャンパスで行います。

Q 合格者作品の開示はしないのでしょうか。

A 一部の作品は入試説明会で公開しています。

Q 総合実技は何を意図した試験ですか。

A 発想力、判断力、集中力、手を動かす力など「考えること」と「作ること」を総合的に試す試験です。

Q 個人ファイル作成にあたり、芸術に関係のない活動履歴も含めた方がいいのでしょうか。

A その活動履歴が、先端芸術表現科で勉強したいことに重要な要素であるかを、自分で判断してください。

Q 他学科との関わりはありますか。

A 学科を横断して行う授業やプロジェクトがあります。他の学科と一緒に学ぶことや活動する機会があります。

Q 授業料免除・入学金免除の制度はどのようなものですか。

A 納付が著しく困難であると認められる者に対し、選考のうえ、授業料の全額または半額を免除する制度があります。入学金に関しても同様に、全額または半額を免除する制度があります。

Q 奨学金の制度はありますか。

A 様々な奨学金制度があります。詳しくは東京藝術大学ウェブサイト内の「奨学金」の欄を確認してください。

Q 先端芸術表現科以外の大学施設の利用は可能ですか。

A 本学には、付属図書館、共通工房、写真センター、芸術情報センターなどの教育研究施設があり利用可能です。

Q どのような資格が取得できますか。

A 教育職員免許状、学芸員資格が取得可能です。

Q 学国祭のようなものはありますか。

A 東京藝術大学祭「藝祭」、五芸術大学体育・文化交歓会「五芸祭」などの年間行事があります。

Department of Inter-Media Art

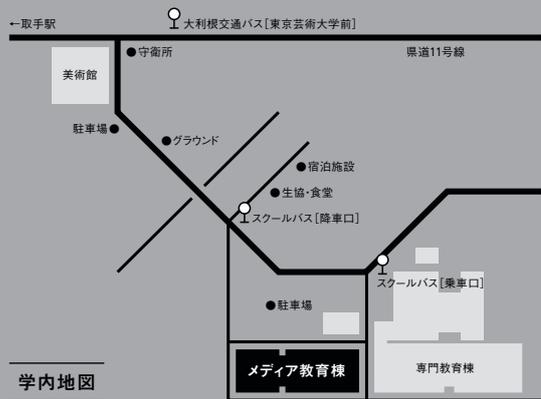
13



表紙掲載作品 | 〈画像墓場—忘れ得ぬ風景—〉荒渡 巖
 2017年 / 漂着物、インクジェットプリント、ディスプレイ、ソーラー発電、光学レンズ、ほか

荒渡 巖 Iwao Arawatari

1986年生まれ。東京育ち。2017年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。SNSのコミュニケーション空間やディスプレイに投影される画像の持つ特殊な体験に傾注し、制作を行っている。サロン・ド・プランタン賞受賞。主な展示に「転生 / Transmigration 2015」Alang Alang House (インドネシア)、「カオス*ラウンジpresents「怒りの日」」(福島)などがある。



東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科
 東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
 〒302-0001 茨城県取手市小文間5000 メディア教育棟
<http://ima.fa.geidai.ac.jp/>

交通アクセス

[電車+バス] JR常磐線「取手駅」東口から大根交通バス「東京芸術大学前」、またはスクールバスで約15分。[車] 常磐自動車道「谷和原 I.C.」から車で約45分。